

主体の解釈学

1982 年 3 月 17 日の講義（第 1 時限） pp.465-90

K 原

ピュタゴラス主義の沈黙の規則の意味に関する補足的説明（pp.465-8）

沈黙と聴取の話：アウルス＝ゲリウス『アッティカの夜』第 1 巻（2 世紀）

- ピュタゴラス派の、聴取と沈黙の関係の問題にかかわる内容
- この本への言及理由：フォーコーがピュタゴラス派の沈黙の掟に与えた意味を裏付けるものであるため。「沈黙の規則、パレーシアの原則などを通して、真実の言説の形成と伝達と獲得の規則を研究しようと思っている」とのこと（p.467）。この真実の言説は「魂に必要な装備＝パラスケウエーを構成し、これのおかげで個人は人生においてさまざまな出来事に立ち向かうことができるし、その準備ができる。

〈ピタゴラス派の伝統〉「沈黙（言葉の禁止）とは、本質的に記憶の訓練である」（p.466）

1. 教えを受けたいと若者が申し出る。ピュタゴラス派は「人相」によって若者を吟味する。「人相」により、若者が合格と判断され、生徒になる。
2. 生徒には、ある期間の沈黙（研修期間）が課される（短くて 2 年）。
* 質問することや書き留めることも許されないで、記憶に刻みつけなければならないといけ
→これが、学習（＝修練？）の第一の土台である。
3. 研修期間が終わると、語ったり書き留めたりする権利を得る。この期間に、生徒は「学問生」と呼ばれる。

（！）ただし、ゲリウス以前の哲学者タウルスの時点で、このような「沈黙と聴取から言葉への参加へ、そして学問の学習へ」という美しい段階はもはや守られていない。

「修練的なもの」の定義（pp.468-9）

修練のまったく違う層の話（沈黙と聴取の話ではなく真実の言説の実行、その発動に関する話）

- 思考や記憶として発動させるのではなく、主体の活動そのものにおいて発動させるということ、どのようにして真実の言説の能動的な主体になるのか？ということである。
- 「修練的なもの」、つまり、主体の活動そのものにおける真実の言説の発動において、真実の言説や真理はエートスになる。これこそが、厳密な意味におけるアスケシスである（⇔放棄や苦行などの態度を示してしまふ「禁欲主義」という言葉では表さない。そうではないため）。
- 「修練的なもの」とは、調整された訓練の総体のことで、個人はそれを利用して一定の霊的な目標に達する。霊的な目標とは、行為の主体と認識の主体としての自分自身のある種の変容のこと。ということは、「修練的なもの」（与えられた訓練の総体）によって霊的な変容という目標に到達できるということになる。

どのような訓練なのか？

- 「修練的なもの」の問題は、本質的には技法の問題であると分析できる。節制、省察（死の省察の訓練、未来の災厄の予期の訓練）、良心の吟味……など

ギリシアの「修練的なもの」の歴史的エスノロジーの見取図（p.469-70）

「修練的なもののエスノロジー」（p.469）：さまざまな訓練をたがいに比較し、その発展や伝播を追跡すること

1. シャーマン的な起源に由来し、紀元前 7-8 世紀に修験した訓練
（どこまで飢えや寒さに耐えられるか手柄としての節制の訓練、誰がこの種の訓練を耐えられるか試練としての節制の訓練、できるだけ息をとめたり呼吸したりしないようにする死に対する訓練）

2. ギリシアの霊的訓練（「修練的なもの」）

→ギリシア人たちは1を学び取ったが、この2の「修練的なもの」は、1と連続するのか？それとも異なった実践の総体なのか？ *アドは非連続性を、ドッズとヴェルナンは連続性を支持している（うーん、誰？）

『アルキビアデス』再考。「修練的なもの」が、神的なものの鏡としての自己認識に折りたたまれること（pp.470-1）

- 『アルキビアデス』では、〈汝自身を知れ〉が〈自己への配慮〉を覆い隠していた。〈汝自身を知れ〉が、占領してしまう。〈自己への配慮〉は、最終的には〈汝自身を知れ〉を意味していた。（実行・発動ではなく、あくまで記憶・認識の問題として捉えられているということと整理）

1-2世紀の「修練的なもの」。二重の離脱（自己認識の原則に対して。神的なものにおける認識の原則に対して）（pp.471-2）

- ストア派、帝政ローマ末期のストア派・犬儒派において展開した「修練的なもの」
- 『アルキビアデス』とは異なり、「修練的なもの」は、自己認識の原則を中心に組織されていない。
*古典的プラトン主義においても、フィロソフィアとはアスケーシスにほかならないということが根本的の原則になっている。また、ストア派・犬儒派の修練において自己認識が問題にならず、排除されているわけでもない。ただし、『アルキビアデス』で言われたり表明されたりしていることからの二重の離脱が確認できる。

二重の離脱1：「修練的なもの」訓練の総体が、自己認識の命法（『アルキビアデス』で表されていたもの）から離脱

二重の離脱2：神的要素（神への相似）としての自己の再認（プラトン主義・新プラトン主義で中心軸となっていたもの）からの自己認識の離脱

→二重の離脱は、訓練の歴史的運命の出発点にあり、かつ、キリスト教自体の歴史的運命の出発点にもある。

ヘレニズム・ローマの「修練的なもの」のキリスト教的運命の説明。グノーシスの放棄（pp.472-4）

- こうした訓練は、非プラトン主義のおかげ（＝二重の離脱のおかげ）で延命がなされた。
- 2世紀の終わりから4-5世紀全体の修道院綱要においてキリスト教的な霊性が発展するための原動力や大原則＝戦略的な原則は、グノーシス派から解放されたキリスト教的霊性を打ち立てることにあった。

*グノーシス派は根本的に新プラトン主義

「修練的なもの」は、ストア派および犬儒派に由来するもので、新プラトン主義とは次の2点で区別される：

1. 認識の実践を中心としないこと（＝神的要素としての自己の再認をしないこと）
2. 自己の内部において再認しなければならないのは、神的要素ではなく自己に対する疑念

例）ストア派の場合、私の欠点や弱さの痕跡を解説する・キリスト教では、墮落の痕跡を解説すること

→キリスト教の内部で、哲学を起源とする訓練からの移行が行われる（4-5世紀の霊性においてははっきりと移植され、15-6世紀において新たな規模と強さを備え、より強大なものとして再出現する）

まとめ：訓練、すなわち哲学の「修練的なもの」は、キリスト教の中で生き残り、発展した。

生の作品（pp.474-）

- キリスト教の訓練（カトリックの環境）は、ひとつひとつ個別に定義され、1日、週、月、年単位の時間の流れに配置され、さらに個人の進歩の流れの中にも配置されている（16-7世紀には、経験な人の生活は訓練で織りなされ裏打ちされていた）。
- しかし、哲学者の「修練的なもの」は、こういったものはまったく見られない。たしかに規則的な訓練はい

- くつか指示されているが、それ以外はたまたま必要が生じたときに自由に訓練を選択できることが多い。
- 哲学者の修練の場合、与えられるのはいくつかの慎重さの規則や、訓練を行う方法についてのいくつかの件だけで、自由がある。訓練やその連結は曖昧にしか定義されていない。
 - ただし、これだけは忘れてはならないのは、哲学者の「修練的なもの」は、人生の規則という枠組みにおいてではなく、生の技法という枠組みの中で展開するということ (p.475) = 自分の人生をテクネーの対象とすること、つまり、ひとつの作品とすることである。
 - 作品とすることとは、つまり作成者の自由と選択を含んでいるということ。テクネーが絶えず従わなければならない規則の集大成のようなもので主体の自由がなかったならば、生を完成させることなどできない。
- これこそが哲学的訓練とキリスト教的訓練の分割線である。

生存の技法。二つの領域の解説。思考による訓練、現実の状況における鍛錬 (pp.475-8)

- 哲学的な生 (テクネーによって得られると哲学者が規定し、課するような生) は、規則には従わず形式に従う。
- メレターン：現実的な活動をさし示し、自分自身に対して自由に活動する思考が自己に閉じこもることだけではない。現実的な訓練である (例えば農業労働という活動を指し示すことができる)。思考が自分自身に対して行使する労働、思考の労働であると同時に、個人がそのあとにしなければならないことの準備を主たる機能とする。
- ギュムナゼイン：自分自身に対して行う鍛錬のこと。「自己を訓練すること」「自己をきたえること」を意味すし、メレターンよりも現実の状況における実践に大きく関係していると思われる。ある状況を前にすること。

節制の訓練。プラトンにおける格闘家的身体およびムソニウス・ルフスにおける耐える身体 (pp.478-82)

- 〈ギュムナゼイン〉節制と試練の実践を導入して考える。ムソニウスとプラトンの訓練の性質は全く異なる。
- ムソニウス・ルフス『論考』：アスケーシスは、身体を組み込まなくてはならない。
- 魂と身体の結合体についての訓練は、2つの目標を持つべきだ。1つが勇気を持つこと (= 外的な出来事に対する抵抗、それに苦しむことも自壊することも心を奪われることもなく、外的な出来事を耐え忍ぶ力を持つこと)、もう1つが自分自身に対する抵抗、自分を抑制する能力 (という徳) を持つこと。
- プラトン『法律』：アスケーシスは、やっぱり身体を組み込まなくてはならない。肉体的な勇気と同時にその抑制を育てる必要がある。
- 恐れることなく敵と闘い、闘うことを学ぶ。他者との格闘のモデルはすべての出来事や不幸との格闘に役立つ。貞節な生活を送らなければ、オリュンピアの競技に勝つことはできない。鍛錬は勇気と抑制という2つの美德を養ってくれるものである。
- | | |
|--|--|
| <p>・ムソニウス『論考』 (ストア派的節制、軽い鍛錬)</p> <p>節制 (忍耐) → - 外的出来事を耐え忍ぶ力 (勇気)
- 内的運動や自分自身の運動を抑制・規制・支配する力</p> <p>耐える身体、節制する身体
(ストア派、犬儒派の文献で再確認できる)</p> | <p>・プラトン『法律』 (プラトンの鍛錬)</p> <p>鍛錬 → - 外的出来事を耐え忍ぶ力 (勇気)
- 内的運動や自分自身の運動を抑制・規制・支配する力</p> <p>鍛錬される身体、肉体的ないしは肉体的・道徳的なアスケーシスの目的や適用点であるような身体</p> |
|--|--|

- セネカは鍛錬を明確に批判：筋肉を増強したりして時間を過ごす人のことを笑い者にしている
- 鍛錬は身体の重みで魂を満たしてしまうので、軽い鍛錬 (= 身体を助けてくれるような鍛錬) をセネカは好む
- セネカ「祭りに参加すべき？ 謹んだ場合自分は他とは違うと思いたくなり哲学者の傲慢さを誇示することに

なりかねない。だから、より慎重に、少しだけ、ほんの指先だけ参加することだ。だがもっとも慎重なのは、人々がサトゥルナリア祭の準備をしているときに、私たちは祭りの準備をしながら、別のやり方、つまり、現実であると同時に偽装されたものである貧乏の訓練をして準備しなければならない。」（本当は貧乏ではないが、3-5日間実際に貧しい生活を送った）

- このような訓練でしようとしていること（ときどき節制を組み込む）は、備えとして役にたつ。ただし、一般的な節制生活への大転回ではない（それはやがて規則になってしまう）。
- このような訓練が生にフォルマ（形式）を与えてくれ、自分自身を前にして、あるいは人生におけるさまざまな出来事に対して、個人が適当な態度を取ることを可能にしてくれる。適度に無関心であることにより、不幸が起きたときに耐える。
- セネカの態度は、富を使うときに、節制の訓練を反復するときに、彼が食べているものは、たんに飢えをいやすために必要な量にとどめるのが原則であり適当であるということを示している。この節制の訓練は、生の様式を形成するためのものであり、明確な禁止や停止によって生を規則づけるものではない。

試練の実践とその諸特徴（p.482-6）

試練と節制との違い3点

1. 試練では、つねに自己の自己に対する問いかけをはらみ、ひとが何をする能力を持っているのか、ある事柄をやりとげる能力を持っているのかが問われる。試練には自己認識の側面がある。
2. 試練とは、つねに思考のそれ自身に対する働きかけ（＝労働）を伴っている。試練が実際に試練であるためには、主体は自分がしていること、それをしている自分自身に対して、ある種の意識的で啓発的な態度を取ることが条件となる。
3. 試練では、現実を前にした一般的な態度にならなくてはならない。ストア派にとっては、生全体が試練となる。⇔節制は、ストア派にとっては人生の一部に局在化された訓練だった。＊3点めについては、次回詳細が説明される模様

1点め：自己認識、自己に対する問いかけとしての試練

- 自分が今どの位置にいるかを確認しようとする、自己認識の努力がある（自分との契約を結ぶ）。

2点め：現実界のなかでおこなわれると同時に思考上のものでもあるような訓練

- たんに行為や節制の規則をみずからに課すことだけではなく、同時に内的な態度を練り上げることも問題になる。例）街で美しい少女に会ったら（by エピクテトス）…何も感じず、まったく虚ろで中立な精神を保てるような境地に至らなければならない（虚ろで大丈夫なの？と個人的には思いますけど）。

→キリスト教的な純粋さと異教の節制とが区別される主要な点であり、重要である

- キリスト教においてソクラテスは嫌われている。なぜなら自己抑制はするが、欲望することはやめないため。エピクテトスの文章はその中間にある。
- エピクテトス：ディアクシスは避けなくてはならない。ディアクシスとは魂の吐露のことで、こうなると抑制を失いかねなくなってしまう。感情やパトスの影響ではなく、自然で正当な運動の影響で抑制を失う。
- だから「あしたのおまえは死ぬだろう」と魂の中で言うのだ。正当な情愛が示すと同時に、（家族や友人、子どもとの？）結合の脆弱さを完全に見てとるような魂の作業によって無関心になる。このような訓練が試練をかたちづくる。

…しかし、こうしたことは二次的なことに過ぎない。次回、生全体が試練の形式をまとうような水準へと転位することを話す。